

---

# 魔王の幼馴染み

主人公を引き立たせるのは脇役！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王の幼馴染み

### 【Nコード】

N9932Y

### 【作者名】

主人公を引き立たせるのは脇役！

### 【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの二次小説です。

まあ、暇潰しの作品です。過度な期待は、しないでください。

ガタン、ガタン、ガタン。

ん。なんだ、外から音がする。

何の音だ？

これは……ああ、そつだ電車に乗ってる時によくある音だ。

あれ、でも俺は、電車なんかに乗ってたっけ？

とりあえず、起きるか。

？『やつぱり、電車だ。』

青年がいるところは、電車だった。

青年以外他の客も運転手すら乗ってない無人で走る電車だった。

ただ、普通の電車とは違うのは、降りる扉がなく、そして車両と車両をつなぐ扉が古い木製の扉に変わっていた。

？『なんだ、此処は？』

青年の目には。木製の扉が写った。

？『これは…鍵が無くても開くのか？』

そして扉を開いた。

？『ツ！！』

そしてその扉の向こうにあったものは？

？「おやおや。また変わった運命を持ったお客様が来るとは。」

そこには、部屋全体が青く塗られ、車両よりも部屋の空間が大きく見えた。

そして、大きなテーブルに高そうなソファーに座る鼻が長い老人がいた。

伊「ようこそ。ベルベツトルムへ。お初にお目にかかります。私の名は、イゴール。」

？「なんで、なんでペルソナのイゴールがここにいるんだあああああああああ！！！」

伊「正確には、私は、イゴールであってイゴールではありません。」

？「へ？」

伊「私をここに持って来たある存在があなたのような変な運命を持った人間を異世界に送りその力を目覚めさせようとしているのです。」

「

？「じゃあ、あなたは、その存在がペルソナの世界からイゴールという存在をここに持って来たわけ？」

イ「さよう。私は、あなたの力の案内人をつとめさせていただき  
ます。」

?『はあ、よろしく?』

イ「あなたには、今から異世界いわば二次創作の創作の世界に行っ  
てもらいます。」

?『それって一度行ったら戻って来れないとか?』

イ「それは私には分かりません。」

イ「ところであなた様のお名前なんと言うのでしょうか。」

?『ん?ああ!教えてなかったな。俺は、乙崎おつさぎ 紫音しおんだ』

イ「では今からあなた様には、この十三枚のカードのうちどれかを  
お引きください。」

イゴールがそう言った瞬間テーブルには十三枚のカードが出てきた。

とりあえず、適当に一枚引こう。

引いたカードは………真っ白だった。

イ「やはり、あなた様は変わった運命をお持ちだ。そのカードの意  
味はあなた様が異世界である謎を追いますといずれそのカードにあ  
る力が宿ります。今はまだあなた様が追う謎が霧がかかっているた  
めそのカードも真っ白でございます。私の役目はあなた様と一緒に  
そのカードの力を目覚めさせる事になります。」

紫『解った。……………ッ！』

意識が遠くな…っ…てい…く……………。

イ「あなた様にお会いする時には、力が目覚める時でござい  
ます。」

ていうかイゴールがでてアルカナカードを引かせれたって事は、今  
から行く世界は、ペルソナの世界かよ!?

まあ、いいや。とつとこんな事終わらせて元の世界に帰るかな。

ん、またこれか。

さて、めんどいしとつとと起きよ。

紫『なんじゃこりゃあああああ!?!』

気付いたら俺の体は、縮んでいた!!

なんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんででなんで。

5歳児になってんだよ。俺は!?

待て先ずは、状況を整理しよう。

イゴールが勝手に説明してイゴールが勝手に力与えてイゴールが勝手に異世界に送った。

結果、イゴールが悪い。

?「紫音君。どうしたの?」

と暴走に近い状況整理をしていると若い女の人に話しかけられた。

と、とりあえず、返事しよ。え〜と多分、此处は俺の家だと思う。そして、年上の女。

母親決定!!

紫『な、なんでもないよ。おかあしゃん』

か、噛んだ!!

母「まだ舌が上手くまわらないのかな?紫音君。」

は、恥ずかしい！！穴があったら埋めたい。  
間違えた！！はありたいだ。  
また間違えた！！入りたいだ。

母「紫音君。これからママと一緒にケーキ買いに行こっか」

紫「うん。」

良かった。今回は噛まなかった。

母親と共に手を繋いであるケーキ屋に向かった。

翠屋前

こ、此処は。翠屋！！

て事は、まさか此処は、魔法少女リリカルなのはの世界かああああ  
あああ！？

と、とりあえず、ケーキを買って直ぐに帰れば高町 なのはと会う  
ことはない。

ああ、でも会いたいな。高町 なのは。STSだっけ？その時にテ  
ィアナを撃墜した魔王。でも小さい頃から物の見方とか教えていけ  
ば、魔王なんて呼ばれないんじゃ。

て、ああ！！俺が考えてる内にもう翠屋に入ってる。

母「こんにちは。桃子さん。」



桃「こんにちは。栞さん。」

て、知り合いなのかよ!?

桃「この子が前に言ってた息子さん？」

近くで見るとこの人美人だな〜本当に結婚してるのか？

桃「初めまして。お名前は？」

紫『しおんでしゅ。』

嗚んだ!!もういや!!

紫『もういや!!』

俺は、その場から走り去った。

公園

はあ、はあ、つ、疲れた!!

なんであんなに嗚むんだ俺は!!

絶対に変な子だと思われたじゃないか。

て、此処は、公園?それにもう夕方か。

まあ、暇潰しに砂場で遊んでこ。

砂場で遊ぶつてすっかり子供の思考になつてる。  
悲しい。

紫『着いた！！ん、先客がいる。』

夕方と言ってももう暗くなり始めていて子供何かいないと思つていたら、いた。

栗色のツインテールの少女だ。

無視しよ。

でも何か見捨てて行けない。

はあ〜。

紫『おい。』

俺はその子に話しかけることにした。

?「ふえ…」

紫『お前、こんな時間に一人で何やってんだ。家には帰らないのか?』

?「家に帰つても一人だから、いい。」

紫『親とかいないのか。』

?「ううん、お父さんとお母さんとお兄ちゃんとお姉ちゃんがいる

よ。」

紫『だったら、一人じゃないじゃん。』

?「お父さんが」

紫『お父さんが?』

?「お父さんが怪我してからお母さんもお姉ちゃんもお兄ちゃんも忙しくて私とは遊んでくれないの。」

紫『……ふーん。お前は、言ったのかよ。私と遊んでって。』

?「言えないよ。言ったらお母さん達に迷惑かけちゃうから。」

少女は、目に涙をためながらそう言った。

紫『お前は、遊んでほしいのか。』

?「遊んでほしいよ。けど迷惑をかけたらいい子じゃないもん。」

紫『うるせーよ。』

?「え?」

紫『さつきから聞いてりゃいい子じゃないだとか迷惑とか俺はそういうこと聞いてんじゃねえよ。お前がどうしたいか聞いてんだよ。』

?「私は、」

紫『お前は、一人で寂しいんだろう!! だったら家族に言えよ!! 迷惑? いい子? 家族だからこそ迷惑をかけるだろうが!! 家族だから本音を言えるんだろう。だったら言えよ。一人で寂しいから私と遊んでって。』

? 「……うん、私、一人で寂しいからお母さんに言ってみる。」

紫『そうか。じゃ、行ってこいよ。』

? 「あ、あの私、高町 なのはって言うの。」

紫『俺は、乙崎 紫音だ。』

な「紫音君。また明日も私と遊んでくれる?」

紫『ああ、お前がお母さんにちゃんと言えたらな。』

な「うん!!」

そう言っつて高町 なのはは、走って公園から出ていった。

まさか高町 なのはに会えるとは。

それとは、別に何か忘れているよな?

て、あ!!

俺は、その場から走って翠屋に向かった。

その途中に母親と会い、こっぴどく叱られた。

その叱られているときに頭に何か響いた。

あなた様と高町　なのは様の絆が生まれた。

高町　なのは様との絆の力は、2

あなた様は、高町　なのは様のレアスキル『魔力収束』が使用出来るようになりました。

これ完璧にペルソナじゃん。なのはの魔力収束が使用出来るってことは、ペルソナとは違うんだ。

はあ、お母さんに叱られたし今日は、もう寝るかおやすみなさい。

このあと、4年後に原作介入するとは夢にも思わない紫音であった。

てか、ジュエルシード事件も終わり、俺に平和が戻った。

え？時間が進みすぎ？

そこは、まあ置いてこう。

まあ、プレシアさんとアリシアちゃんは、助けられなかった。

原作通り虚数空間だっけ？それに落ちてお亡くなりになった。

あと、f a t eの英霊エミヤの無限の剣製を持った転生者と会った。アイツいきなりなのはの家族と行った温泉のところではとフェイトが戦う瞬間に割って入りやがった。そして、いきなりなのはとフェイトに向かって「俺の嫁達、俺のために争わないでくれ」なん

て言いやがった。

フェイトは、アルフの後ろに隠れて、なのはは、俺の後ろに隠れた。そいつは、俺の方に向かってきて「俺のなのはに手を出すな!!!」とか言つてエクスカリバーを投影して斬りかかってきやがった。チートされてやがる!!!

まあ、毎日士郎さんと恭也さんに追われてる俺にとっては、よければ速度だったので、なのはからデバイスを一時的に使えるようにしてもらい、なのはお得意のデイバイン・バスターをお見舞いした。度々邪魔してきたので同じことを何度もして追い返し続けた。しっこかった。

その後は、原作と違った事は、異様にフェイトが俺を見る目が凄く感謝している目だった。

まあ、理由は、あの転生者です。

クロノとはいい友達関係を築いています。

クロノから電話で愚痴を聞かされる事が多いからクロノは、クロノなり苦労しているんだと思い、ユーノと連絡を取ってクロノに大量の栄養ドリンクを送った。

ユーノとは悪友関係を築いています。

ユーノは、頭も良いし顔も良いので嫉妬しています。

ユーノなんてシネバイイ。

まあ、大体平和ですね。

さて、そろそろなのはが迎えに来るのでまた、会いましょう。

え、イゴールの出番？  
アイツに出番なんかない！！

(後書き)

感想は、一応待ってます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9932y/>

---

魔王の幼馴染み

2011年11月29日23時50分発行